

2019年度全国事務局長会議で災害対策の講演会を開催

7月27日に各都道府県組織事務局長と実務担当役員を対象とした「2019年度全国事務局長会議」を開催しました。テーマとして今ある危機を乗り越えるための3つの課題が議論され、課題の1つとして大規模広域災害に備えた災害対策について東京都透析医会災害対策委員会委員長で東京女子医科大学血液浄化療法科准教授の花房規男先生を講師にお迎えし災害対策の講演が行われました。

日本は、活断層が複数あり地震の発生がとても多く、とくに震度6以上では、道路が混雑し車が使えないので、移動は徒歩の可能性が高くなる事と、さらなる透析施設の地震対策が大切で、その際に4つルールがあるとの事でその内容は

- ① ベットサイドコンソールを動けるようにする事
- ② 穿刺した針が抜けないように患者さんのベッドを固定する事
- ③ 透析供給装置とRO装置の床面を壁や床にしっかりと固定する事
- ④ 壁面と接続部の配管を堅いものでなくゴム製で柔らかいフレキシブルチューブを使う事

特に、震災発生後、施設が機能するには、水道の復旧が鍵となる事、通院先や被災地の地域の情報収集として日本透析医学会の災害ネットワークのメーリング情報の活用とJHAT（日本災害時透析医療協働支援チーム）との連携が大事である事と、災害時に通院先で透析が出来なくなる事や避難生活も考えて、服用薬以外にドライウエイトや禁忌薬、透析情報などを記載し、自分が透析患者である事を周囲に伝える事、災害時に防災対策として、3助と呼ばれる、「自助」「共助」「公助」の内大きな災害時には、公助がすぐに得られない場合が多いので、自身で行える自助を優先する事。

行政の協力や病院間と地域の連携を強めていく事で大規模災害に対応する重要性を講演会でお話されて、盛会のうちに講演会が終了しました。

かばんサイズの血液浄化装置を開発

災害による施設での透析が出来ない場合、緊急時に透析患者の血液浄化を目的とした持ち運び可能な血液浄化装置を山梨大学医学部の松田兼一教授の研究グループが、開発しました。

新型はアタッシュケースより小さく、血液を濾過する部分を従来の8分の1程度にし、血液を引き出すポンプも500円硬貨サイズにして、重さも電池込みで3～4キロになり機動性も向上しました。血液が量も多いヤギで新型装置の性能を確かめた所最長で2週間血液を濾過し続け、その間のポンプ交換は不要で装置が停止をする事はありませんでした。

この情報は、山梨県腎臓病協議会からご提供を頂きました。



北海道腎臓病患者連絡協議会がヘルプマークの普及を進めています

災害や緊急時に備えて、各自が透析に必要な情報を記入し折りたたんで携帯できる透析患者へのヘルプマークの推奨を進めています。興味のある方は、全国ヘルプマークネットワークのホームページからダウンロードできます。

<https://www.skart-tokyo.com/>



A4サイズを6つに折ると携帯できるヘルプマークカードになります。

災害時、緊急輸送にタクシー活用で船橋市が事業者と協定

船橋市は、災害時に人員や必要な機材を迅速に輸送するため、千葉県タクシー協会京案文部と協定を締結したとの情報がありました。

大規模災害時に市の要請で、高齢避難者や病院患者、災害用機材の輸送などを目的にタクシーの出動が可能となり、市内外の約30社以上が加盟し寝台車や車いす搭載可能な車も含め約1500台のタクシーを所有しており「地元の道を熟知し、幅広い輸送体制を確立できる」などから協定締結に至ったとの事です。

壁新聞のお問い合わせは 全腎協事務局へ TEL：03-5395-2631 FAX：03-5395-2831

